

思考力・判断力・表現力等を育成する社会科指導の試み

——自分事として捉える課題設定と対話的な学習の工夫を通して（第1学年）——

恩納村立恩納中学校教諭 宮 城 修

I テーマ設定の理由

情報化やグローバル化等がますます進むこれからの変化の激しい社会においては、「主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していく」ことが求められ（文部科学省『教育課程企画特別部会論点整理』）、子供たち一人一人の可能性を伸ばし、新しい時代に求められる資質・能力を育成することが重要だとされている。また、新学習指導要領のキーワードの1つに「主体的・対話的で深い学び」が挙げられ、今後も学ぶことに興味・関心を持ち他者との関わりの中で様々な見方や考え方をもとに課題を解決し、新たな価値を創造し、生涯にわたり学び続けていくことが重要だと考えられている。

本校の生徒の現状をみると、学習に対して意欲的で活発である。しかし、自分の意見をまとめることが苦手な生徒が多く、話し合い活動においても一部の生徒の考えがグループの意見になることが目立っていた。これは、授業に参加する生徒一人一人に社会科への関心を持たせる工夫が上手くできず、何のために話し合いをするのか、自分の考えをまとめることがなぜ大切なのかについて、意識させる働きかけが弱かったからである。

また、これまでの実践においては一斉指導が多くなりがちで、生徒の活動が中心となるような授業の工夫があまりできなかった。特に歴史の学習においては教師の伝達による暗記的な学習に偏り、多様な見方から歴史的事象を捉え、現在の社会にどのような影響を及ぼしているのかを考える授業展開ではなかった。以上の反省から、これからの社会を生きる生徒たちが、様々な考え方のもとに自分の意見を形成し、社会や他者とどのような関わりをもつことで充実した生き方を送ることができるようになるのか、考えるようになった。

そこで、歴史的事象について自分なりに意見を考えまとめる場面を設定し、意見の交流が深まる対話的な学習の工夫を図ることで、思考力・判断力・表現力等を育成しようと考えた。また、学んでいることを自分や社会と関連づけた学習を進めることで、有用性や必要性を実感し、主体的に学び、他者との関わりの中で試行錯誤しながら課題の解決に向かい、自分の考えを整理し表現する力を身に付けさせたいと考えた。

具体的な工夫として、歴史的事象に対し「自分はこう考える」「当時の人々の立場になって考える」「今の時代だったら」等、自分事として捉える学習課題を設定し、思考力・判断力・表現力等の育成を図っていく。生徒は歴史と自分との関わりをあまり認識しないため、歴史的事象を遠い昔の他人事のように捉えてしまうことが多い。そのため、思考や理解に深まりをもたせることが難しくなってしまう。そこで、歴史と自分を結び付けたり、当時の様々な人々の立場になって多角的に歴史を捉えたりすることで歴史的事象を自分事として認識し、自分なりの考えを深めることができるようにしたいと考えた。また、ペアやグループ活動等において、一人一人の意見が話し合いの中で生かされるように発表する場面や教材教具等の工夫を図ることで、考えたことを伝え合いながらグループの意見をより発展させ、多様な考え方をもとに自分の意見を形成できるようにしていきたい。

〈研究仮説〉

歴史的分野、第2部「古代国家の成立と東アジア」第3章「中国にならった国家づくり」と第4章「展開する天皇・貴族の政治」の単位において、歴史の当事者の立場に立った課題設定、歴史的事象と現代社会や自分自身を関連付けた課題設定を工夫し、かつ、対話的な学習を工夫することによって思考力・判断力・表現力等を育成することができるであろう。

Ⅱ 研究内容

1 思考力・判断力・表現力等について

AIやIoTの情報技術が進歩し、産業の多様化が進む中で現代社会は急速な変化を遂げている。このような社会変化は今後も続くと考えられ子供たちが大人になる頃には予測困難な時代になると言われている。その中であって、社会の変化に対応するためには物事を多様に捉えたり、自分の意見をまとめ表現したり、他者と関わり合う力はますます必要になると考える。新学習指導要領解説総則編においては、図1のように教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力として「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つを柱として掲げている。思考力・判断力・表現力等については「理解していること・できることをどう使うか」と示し、知識を

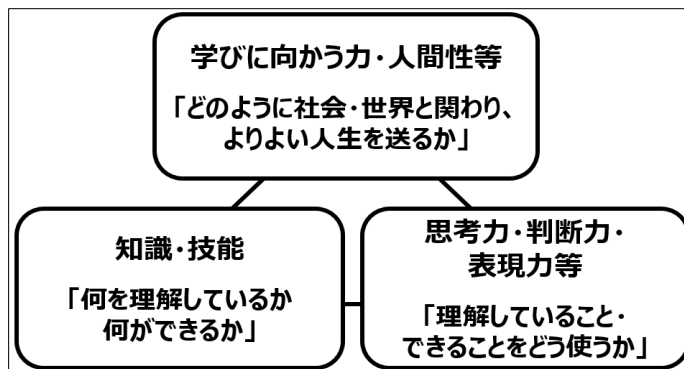


図1 資質・能力の三つの柱

獲得し、それを活用しながら問題を解決していくことが重要だと述べている。よって、生徒には学習や経験を通して身に付けた知識や技能を生活や人生、激変する社会の中で活用できるように思考力・判断力・表現力等を身に付けてほしいと考える。また、『教育課程企画特別部会論点整理』では「対話や議論を通じて互いの多様な考え方の共通点や相違点を理解し、相手の考えに共感したり多様な考えを統合したりして、協力しながら問題を解決していく」ために、思考力・判断力・表現力等の育成を図ることが重要であるとしている。本研究における思考力・判断力・表現力等を育成する取り組みを通して、未来を生きる生徒たちが自分の意見をしっかりと持ち、対話を通してよりよい人間関係を築き、人生を充実させることができるようにしていきたい。

また、新学習指導要領解説社会編では、社会科における思考力・判断力とは、社会的事象個々の仕組みや事象相互の結び付き等について様々な角度から捉え、多種多様な課題の解決に向けて自分の考えをまとめる力とされる。そして、様々な角度から捉えることについては、社会的事象自体が様々な側面をもつ「多面性」と、社会的事象を様々な角度から捉える「多角性」とをふまえて考察することとしている。表現力については、思考・判断したことを資料等を用いて論理的に示したり、根拠を基に自分の意見や考え方を伝え合い、そこから自分や他者の意見を発展させたり、合意形成に向かおうとする力であるとしている。また「位置や空間的な広がり，時期や時間の経過，事象や人々の相互関係に着目して社会的事象を捉え，比較・分類したり統合したり，地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること」として社会科における見方・考え方を示し、資質・能力を育成するための手段として位置付けている。

授業実践においては生徒が比較を通して相違点等を明確にしたり、背景や影響などの事象同士を関連付けたりすることで歴史的事象を捉えることができるようにし、かつ、歴史的事象に対する自分なりの意見を持ち、他者と協力して課題の解決に向かう等、思考力・判断力・表現力等を身に付けてほしいと考える。

2 自分事として捉える課題設定の工夫について

(1) 自分事として捉える課題について

現代的な要素を多く含む地理的分野や公民的分野と異なり、歴史的分野においては学習者が自分や現代との関わりを意識することは弱いように思われる。それは、地理・公民が自然、産業、政治、経済等、現代社会の中における現実の人間の営みを学習する分野であるのに対して、歴史は学習者が体験しにくい過去の事象を学習する分野だからである。篠原昭雄（1994）は学習者側から見た歴史の学習の課題として「歴史的事象・事実は、生徒とのかかわりのないものが多い。その場合には、何故歴史を学習するのか意義を認めない」と述べ、「歴史を自らとかか

わりのあるものにするには、身近な歴史事象や歴史上の人物を取り上げたり、歴史の事実を追体験させたり、身近な生活や文化・意識と比較したり、或いは共感的な理解をさせたりすることが重要であるとしている。

本研究においては自分事として捉える課題として「①歴史の当事者の立場に立った課題」と「②歴史的事象と現代社会や自分自身を関連付けた課題」とした。歴史の当事者の立場に立って歴史的事象について考えることが追体験となり、そして、当事者の心情を読み取ることで共感的理解につながると考えた。1つの歴史的事象に対して様々な立場から見ることで、生徒が歴史を多角的に捉える力を身に付けてほしいと考えた。同じように、現代社会や自分自身と関連付けた課題については、歴史的事象を身近な生活や文化等と比較する事で、歴史が現代社会にどのように影響しているのか、自分の生活や生き方にどのように関わっているのかを考えることができるとした。また、単なる予想や思い込みに終わらないように留意し、資料の読み取りとその解釈等を通して歴史的事象を捉えることができるように工夫する。

(2) 学習課題の工夫について

学習課題とは、単元または毎時の授業における目標を達成するための内容や活動を示したものであり、学習のゴールを明確にすると同時に学習への動機付けを図る機能がある。青柳慎一（2015）によると、学習課題とは「取り上げる内容や身に付けさせたい能力、生徒の実態等を踏まえ学習目標を設定し、これを学習者に対して問いや指示の形で示したもの」とし、学習課題を設定するポイントとして表1のようにまとめている。本研究においては、生徒の興味・関心を高め、これまでに学習した知識だけでは解決することが少し難しいような課題を設定することで思考をゆさぶり、生徒が歴史上の場面に当事者となって身を置き、考えや理解を広げ深める学習課題を設定していく。

表1 学習課題を設定するポイント（抜粋）

- ・授業のねらい（学習目標）と整合し、授業のねらいが達成できる課題を設定する。
- ・生徒にとって取り組める（解決できる）課題を設定する。
- ・生徒の既得知識をゆさぶり、知的好奇心を触発する課題を設定する。
- ・場面設定を生かし、臨場感をもたせる課題を設定する。
- ・実際の社会との結び付きを意識させ、有用感のある課題を設定する。等

また、学習課題にせまる教材としては資料の活用が考えられる。歴史の学習においては直接体験できる教材が少ないため、絵や文献等の資料を活用することが求められる。青柳は資料の提示のポイントとして「資料を読み取る視点を具体的に指示し、焦点を絞る」ことを挙げている。資料を読み取る指示が曖昧だと、何をどのように読み取ればよいのか生徒が分からなくなってしまう、その後の話し合いの場面等においてもポイントが定まらないまま学習が進むことになってしまう。そこで、焦点を絞って指示を具体的に示すことで学習のねらいから外れることなく、生徒が何を読み取ればよいのか明確にすることができる。

3 対話的な学習の工夫について

授業において思考力・判断力・表現力等を育成するために、課題設定を工夫することと共に他者と関わる対話的な学習の工夫が重要だと考える。現行の学習指導要領では言語活動の充実が示され、その基本方針は新学習指導要領でも引き続き重要とされている。安野功（2007）は対話的な学習の特色として「子どもが自ら対話する相手に問いかけていくアウトプット型の学習スタイル」「友だちとの対話を通して、理解が深まっていく」「考えることの深みや広がりを経験し、社会科を学ぶことの楽しさが味わえる」の3つを挙げている。対話的な学習においては、他者の多様な意見にふれることで新たな視点に気づき、疑問に感じたことを相手に問かける等のコミュニケーションを通して、自分の考えや理解を広げ深めることが可能となる。また、対話的な活動を進めるにあたっては、どのようにしたら相手に分かりやすく伝えることができるのか考えるようになる。このような経験を通して、安野が述べた「学ぶことの楽しさや、充実感を得ていく」と考える。

また、対話的な学習を進めていく上で、一人一人が話し合いに参加し、意見が生かされる工夫を行っていく。具体的には、一つめに多様な意見を比較・関連付けたり、集約したりできるようにグループのワークシートを工夫する、二つめに意見が可視化でき、意見の変容がわかるように付箋紙やホワイトボード等の教具を活用する、三つめに質問をする時間の設定等、意見が活発に交流していく場面を設定していく。対話的な学習を進めることにより、生徒が積極的に学習に臨み、自他の意見を交流する中で試行錯誤し、協力して課題解決しながら自分の考えを発展させ、形成することができるようにしたい。

Ⅲ 指導の実際

1 単元名 第2部「古代国家の成立と東アジア」(『社会科 中学生の歴史』帝国書院)

小単元名 第3章「中国にならった国家づくり」

第4章「展開する天皇・貴族の政治」

2 単元目標

- ・東アジアの文物や制度を積極的に取り入れながら律令国家の仕組みが整えられ、その後、天皇や貴族による政治が展開したことを理解できるようにする。
- ・仏教の伝来とその影響、仮名文字の成立などを基に、国際的な要素をもった文化が栄え、それを基盤としながら文化の国風化が進んだことを理解できるようにする。

3 評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象についての 知識・理解
古代までの歴史的事象に対する興味や関心を高めたり、意欲的に追究したり、その特色を捉えようとする。また、古代までの文化遺産等を尊重しようとする。	東アジアとの関わりと律令国家の確立に至るまでの過程、摂関政治、仏教の伝来とその影響、仮名文字の成立などについて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	東アジアとの関わりと律令国家の確立に至るまでの過程、摂関政治、仏教の伝来とその影響、仮名文字の成立などに関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。	大陸の文物や制度を取り入れながら国家の仕組みが整えられていき、天皇や貴族の政治が展開したこと、国際的な要素をもった文化が栄え、後に文化の国風化が進んだことを理解し、その知識を身に付けている。

4 単元の指導計画と評価計画(全9時間)

時	教材名・目標	自分事として捉える課題	評価の観点・方法
1	「奈良時代をながめてみよう」 ・資料を読み取って解釈し、それをペアやグループで対話的に話し合う活動を通して、日本の古代の特色を奈良時代を例に多角的に考え、説明できるようにする。	・奈良時代の想像図の読み取りをその場所を見学してきたという想定で行う。(フォートランゲージの手法) ・当時の庶民の生活や心情をその立場になったつもりで考える。	【思考・判断・表現】 【関心・意欲・態度】 話し合い活動 ワークシート 自己評価・相互評価
2	「ヤマト王権と仏教伝来」 ・日本と隋の外交について、両国の指導者の立場になって話し合う活動を通して、聖徳太子と蘇我氏の政治が東アジアの国際情勢の中において中央集権国家を目指していたことを理解できるようにする。	・日本と隋がどのような外交を展開したのか、両国の指導者の立場になったつもりでロールプレイをする。 ・上記の活動をふまえ、聖徳太子らがなぜ中央集権国家を目指したのか話し合う。	【知識・理解】 【思考・判断・表現】 ワークシート 話し合い活動 自己評価・相互評価
3	「律令国家をめざして」 ・古代と現代の政治や社会の仕組みを比較したり、律令の重要性をペアで話し合う活動を通して、大化の改新の目的や大宝律令等の意義と仕組みが理解できるようにする。	・改新の詔や大宝律令の内容と現代社会の仕組みを比較し、相違点を探す。 ・なぜ、きまりに基づく政治が行われるようになったかを考える。	【知識・理解】 【思考・判断・表現】 ワークシート 自己評価

4	「律令国家での暮らし」 資料を読み取って解釈し、それをペアやグループで対話的に話し合う活動を通して、土地・税制度の仕組みとそれらが農民の生活にどのような影響を与えたかを考え、説明できるようにする。	- 奈良時代と現在の税制度を比較し、どのような違いがあるのか話し合う。 - 貧窮問答歌と戸籍資料に残る当時の家族構成を読み取り、負担に苦しむ農民の心情を考える。	【思考・判断・表現】 【技能】 話し合い活動 ワークシート 自己評価
5	「大陸の影響を受けた天平文化」 国内外にある文化財の特色を比較し、仏教と政治の関連を捉えることによって、国際的・仏教的な要素をもつ天平文化の特色について考え、説明できるようにする。	鎮護国家の政策のもと、寺院の勢力が強くなった状況について、僧や庶民がどのように感じていたのかを、その立場になったつもりで考える。	【思考・判断・表現】 【知識・理解】 ワークシート 自己評価
6	「権力をにぎった貴族たち」 摂関政治の問題点を藤原氏と天皇の立場になってペアで話し合う活動を通して、貴族政治がどのように展開したのかを理解できるようにする。	- 摂関政治の特色と問題点を藤原氏と天皇の立場になって考える。 - 摂関政治を続けるうえで工夫したことを、藤原氏の立場になって考え話し合う。	【知識・理解】 【思考・判断・表現】 話し合い活動 ワークシート 自己評価
7	「唐風から日本風へ変わる文化①」 資料を読み取り、奈良時代と平安時代の文化を比較することを通して、国風文化にはどのような特色があるのか理解できるようにする。	国風文化の特色の中で、どのようなものが現代まで続いているのかを考える。	【知識・理解】 【技能】 ワークシート 自己評価
8 本 時	「唐風から日本風へ変わる文化②」 資料の読み取りとグループの話し合いを通して、仮名文字の発展が国風文化にどのような影響をもたらしたのか考え、説明できるようにする。	- 平仮名と片仮名の便利な点や良い点を考える。 - なぜ、仮名文字が使われるようになったのか、当時の人になったつもりで考え、話し合う。	【思考・判断・表現】 【関心・意欲・態度】 話し合い活動 ワークシート 自己評価・相互評価
9	「古代の歴史と現代をつなげよう」 グループの話し合いを通して、古代の歴史的事象と現代社会との関わりを考え、古代の歴史的事象（人物）が現代社会に及ぼしている影響をまとめられるようにする。	- 古代で学習した歴史的な出来事（人物）の中から、共感したものと共感しなかったものを考える。 - 古代の歴史的な出来事（人物）の中で現代社会への影響が最も大きいものを話し合う。	【思考・判断・表現】 【関心・意欲・態度】 話し合い活動 ワークシート 自己評価・相互評価

5 本時の指導（8／9時間）

(1) 本時の目標

国風文化の特色の1つである仮名文字の発展が平安時代の文化等にどのような影響をもたらしたのかを考え、説明できるようにする。

(2) 授業仮説

資料（平安時代に作られた和歌）の読み取りと平仮名と片仮名の特徴や仮名文字の起こりについてグループで話し合う活動を通して、仮名文字の発展が平安時代の文化等にどのような影響をもたらしたのかを考え、説明することができるようになるだろう。

(3) 評価規準

社会的な 思考・判断・表現	学習活動における具体的な判断規準		
	A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (努力を要する)
仮名文字等の日本独自の文化の発展等に着目し、国風文化の特色について考察し、自分の意見をまとめている。	Bに加え、仮名文字の特色（仮名文字の便利な点や仮名文字によって感情を表しやすい等）について説明している。	仮名文字の起こり等を取り上げて、国風文化（日本らしい独自の文化）の特色について説明している。	国風文化の特色を説明していない。

(4) 授業の展開

過程	学習活動・内容・発問等	指導上の留意点	評価
導入 (10分)	1、平安時代の貴族の暮らしについて ・クイズを行い学習の動機づけを図る。 T:「次の内、正しいものはどれでしょう。」 ア 寝殿造にトイレはなく、砂を入れた箱を用いた。 イ 1日2食が基本で、白米や魚のほかチーズも食べた。 ウ 結婚の決まりや手続きはなかった。 S:自由に発言し、それぞれの選択肢について考える。現代との差に驚く。 ・結婚の決まりは特にないが、貴族の恋愛に和歌(文字)が不可欠だったことを補足説明しながら本時の学習目標を提示する。 2、本時のねらいを確認 かな文字の発展が平安時代の文化等にどのような影響をもたらしたのか。	・ICT機器の活用 ・生徒の発言をひろいながら今の生活との違いを認識させる。 ・話が大きく逸れないようにする。 ・話が大きく逸れないようにし、本時のねらいへとつなげていく。 ・本時の学習の目的(仮名文字がもたらした影響)を明確にする。	【関・意・態】 ・貴族の生活に関心をもち、意欲的に学習に取り組んでいる。 〈生徒の観察〉 T:先生 S:生徒
展開 (35分)	3、平仮名と片仮名の起こりについて (5分) T:「平仮名と片仮名は何をもとに作られましたか。」 S:漢字がもとになった等。 T:「平仮名と片仮名はどのようにして使い始められるようになりましたか。」 S:文を書く時に使われた等。 ・貴族の女性が平仮名を使って文や和歌を綴るようになった、片仮名は僧が経文にある漢字のふりがなとして使い始めたことを説明する。	・生徒の発言をひろいながら、本時の展開へと導く。 ・ICT機器の活用 ・2千円札の『源氏物語絵巻』の詞書を紹介する。	【関・意・態】 ・仮名文字に関心をもち、意欲的に学習に取り組んでいる。 〈生徒の観察〉
	4、話し合い活動 (30分) T:「平仮名と片仮名が便利な点や良い点は何かを個人で考えましょう。」〈5分〉 ・仮名文字の元になった漢字の一覧表と菅原道真の和歌(「東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ」)を参考に個で考える。 ・平仮名は赤色の付箋紙に記入 ・片仮名は青色の付箋紙に記入 T:「付箋紙に記入したものを発表しながら、なぜ、仮名文字が使われるようになったのかグループで話し合いましょう。」〈15分〉 ・4名グループを編成する。 ・グループのワークシートに付箋紙を貼り、ホワイトボードに意見をまとめる。 ・各グループ、発表する。〈10分〉 ・漢字のみでは表現できない日本人の心情を書くのに仮名文字が便利であったことを説明する。	・意見をまとめられない生徒に対しては、自分が文章を書くときにどのように使い分けているか想起させたり、キーワードだけの記入でも構わないことを声掛けする。 ・机間指導を行い、具体的な理由等を書いているか確認する。 ・ICT機器の活用 ・菅原道真の和歌を例に補足する。	【関・意・態】 ・自分の意見を発表し、グループの話し合いに参加している。 〈評価シート〉  グループ活動の様子
終末 (5分)	5、学習のまとめ ・仮名文字の発展が平安時代の文化等にどのような影響をもたらしたのかを、個人で考えまとめる。 6、学習の振り返り ・自己評価(学習活動について) ・相互評価(他の人の発表を聞いて良かった点や参考にしたい点などを記述する) 発表の様子	・机間指導を行い、意見がまとめられない生徒に対し、本時の内容を振り返る。 	【思・判・表】 ・仮名文字等の日本独自の文化の発展等に着目し、国風文化の特色について考察し、自分の意見をまとめている。 〈ワークシート〉

6 仮説の検証

本研究では、歴史的分野の「古代国家の成立と東アジア」の単元において社会科の思考力・判断力・表現力等を育成するための手立てとして、一つめに歴史の当事者の立場に立った課題、二つめに歴史的事象と現代社会や自分自身を関連付けた課題を設定し、かつ、三つめに対話的な学習の工夫を行った。そこで、ワークシートにおける生徒の記述内容、授業記録、アンケート調査による分析を基に生徒の変容がみられたか検証を行っていくこととする。

(1) 自分事として捉える課題の検証

① 歴史の当事者の立場に立った課題について

第6時では藤原氏の摂関政治がどのように展開したのかを学ぶ授業において、「摂関政治の特色と課題を藤原氏や天皇の立場になって考えよう」という自分事として捉える課題を設定した。藤原氏は天皇家と外戚関係を保つことで権力の維持を図ったが、権力を保つためにどのような工夫や方策をたてていったのかを考えることで理解を深めさせたいと考えた。

始めに、わずか7歳で即位し、後に藤原氏の娘たちを后にしていった一条天皇を紹介し、「みんなが7歳だったら天皇が務まった？」と生徒に投げかけた。幼くして即位した天皇がいることに生徒たちは驚いた様子だったが「自分にはできない」や「代わりに政治をする人がいたらできるはず」等と興味を示して発言する様子が見られた。そして、次に摂関政治の課題を藤原氏と天皇の立場になって個人で考えた。考えをまとめるにあたっては「藤原氏と天皇がお互いのことをどう思っていたのか」や「藤原氏が権力を握ることに対し心配していることはなかったのか」等のポイントを示し、藤原氏と天皇家の結び付きの上で成立している摂関政治の問題点が明らかになるようにした。生徒たちからは、表2のような意見が出され、藤原氏の立場に立った考え

として、天皇からの信任がなくなると政治を続けることができなくなるという意見、天皇の立場に立った考えとして、藤原氏が権力を握っていることに對して否定的にみている意見等が多く挙げられた。その後、個人で考えた意見をふまえて「藤原氏はどのようにして政治を行ったのか」をペアで考えまとめさせた(表3)。話し合いの場面では机間指導を通して、生徒の発言をひろいながら「じゃあ、藤原氏はどのような工夫をしたと思

表2 当事者の立場に立った課題の生徒の記述内容

私が藤原氏なら	私が天皇なら
・心配することは天皇が自分以外のものに任せたらどうするか。そして、天皇が暗殺されたら自分の地位がなくなる。 ・天皇が大人になって、力をつけすぎたらどうなっていくか心配。 ・娘が男の子をうんでもらわなければ、跡つぎが・・・。	・藤原氏が目障り、藤原と相談しないとイケない。 ・このまま藤原氏が後継人でいいのだろうか？ ・心配することは自分が暗殺されるかということと藤原氏に乗っとられないかということ。

表3 生徒の記述内容

・天皇と次々に藤原氏の人間と結婚させ、政治を行った。そのためには跡つぎが必要なため藤原氏の人間を2人后とした。 ・藤原氏は自分の立場を失わないように天皇が幼いときから接して仲良くし自分の立場を守った。 ・子供の天皇につき合いながら政治の仕組みを自分で操り、娘達を頭を良くし天皇と結婚させこの地位を守った。
--

いますか？」等と更に思考を促す声掛けを行った。また、話し合いの過程で生徒たちからは「藤原氏の娘たちはなぜ天皇との結婚をOKしたの？」や「天皇から結婚しようと申し出たのか？」という疑問が生まれ、「親同士の政略結婚じゃないか？」等の発言が飛び出して、更に生徒同士で意見交換していく様子が見られた。新たな疑問から内容がより深まり、話し合いが他のペアを巻き込んで広がっていった場面であった。

藤原氏と天皇家の立場に立ち自分事として考えることで、平安時代に摂関政治が行われたという歴史の事実だけでなく、藤原氏と天皇家の双方がそれぞれの思惑やお互いの立場等を意識しつつ政治を展開させていったことに気付き、摂関政治の特色と課題についての理解と考えを深めることができた。以上のことから、当時の人々の考えや思いにふれることで、歴史的事象について多角的に考える力の育成につながったと考える。

② 歴史的事象と現代社会や自分自身を関連付けた課題について

第4時では奈良・平安時代の土地・税制度が農民の生活にどのような影響を及ぼしたのかを学ぶ授業において、「古代と現在の税制度を比較しよう」という自分事として捉える課題を設定した。比較を通して相違点をまとめることで、古代の税制度の特色や課題の理解につなげたいと考えた。

始めに古代と現在の税制度に関して「納めているもの」と「税の目的」を個人で考えて付箋紙に記入した。付箋紙を用いることで、一人一人が発表する機会を設けることができ、個人の意見が話し合いの中で生かされるようになった。そして、4名グループで意見交換をし、古代の税制度の特色や課題について話し合いを行った。グループで話し合いをするためのワークシートはマトリックスの形にし、古代と現在の

「奈良時代と現在の税を比べよう」	
	【奈良時代】
納めているもの	税金、どのくらい納めている？ 負担はどれくらい？ 税以外の負担するものは？ 労働力 お米 いげん等も税金とあわせて 金ではなく、米や布を 使っている
税の目的	何のために、誰のために使われている？ 貴族のため (お土成や、ごはんをやくんてす)
	【現在】
納めているもの	税金、どのくらい納めている？ 負担はどれくらい？ 税以外の負担するものは？ お金 物を買った時、しょうやいとして 税金はらっている
税の目的	何のために、誰のために使われている？ 国民のため、みんなに役だっている もの(公園、福祉センター、道路の建設) 経済を支えるため

図2 グループのまとめのワークシート

表4 グループの話し合い記録

- A「税は何に使われた？」
 B「貴族のために」
 A「貴族のためだけに！」
 B「だって貴族は国の仕事をしているから」
 C「なんで、それを庶民だけから集める？」
 B「貴族が権力者だから、仕方ない」
 B「それに、今も国民から税金を集めて、国の仕事をしている」

生徒による授業のまとめをみると「現在と奈良時代は税の使われ方や考え方がちがう。奈良時代の税は国民のためにつかわれていない。性別をかえるほど税への負担が大きかったとわかった」や「奈良時代の税は今と違って貴族のために税を納めたりして、農民に負担が大きかったことを感じた」といった記述があり、古代と現在の違いを明らかにした内容が多かった。

生徒による授業のまとめをみると「現在と奈良時代は税の使われ方や考え方がちがう。奈良時代の税は国民のためにつかわれていない。性別をかえるほど税への負担が大きかったとわかった」や「奈良時代の税は今と違って貴族のために税を納めたりして、農民に負担が大きかったことを感じた」といった記述があり、古代と現在の違いを明らかにした内容が多かった。

また、話し合いの最中には「これ3人だけの意見だね。〇〇さんと〇〇さんの意見が入っていないよ」という合意形成を目指す発言がみられ、また、授業のまとめからは「今の時代の税と奈良時代の税とのちがいをグループで話し合い理解できた」という感想もあり、グループ活動が効果的であったと考えられる。

以上のことから、古代と現在の税制度を比較した自分事として捉える課題設定を通して、古代の税が現在の税制度の基本である国民生活の向上のために使われずに権力者である貴族のために使われたこと、重い税負担が農民の生活を困窮させていたという問題点があったことに気づき、現在の生活と関連付けて考えを深めることができるようになった。

また、検証の前後に実施した「学習した事を自分の生活と関連付けた事がありますか」の質問によると、肯定的な回答をした生徒の割合が57%から71%へと上昇した(図3)。このことから、授業においては古代と現在の事象(税、庶民の暮らし、政治の仕組み等)を比較し、律令国家の成立においては法に基づいた国家の仕組みの大切さを考える場面を設定することで、学んでいることを身近なもの結び付け、自分事として意識するようになったことが分かった。

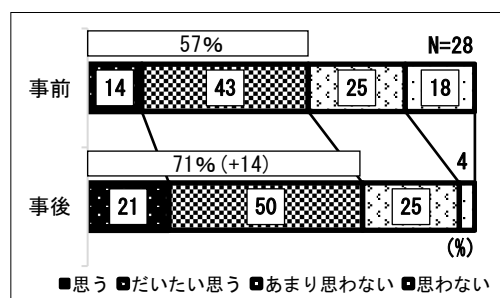


図3 学習した事を自分の生活と関連付けた事がありますか

(2) 対話的な学習の検証

本研究においては、学習課題の工夫と同時に対話的な学習を取り入れることで思考力・判断力・表現力等の育成を図ろうと考え、ペアやグループ活動を計画的に設定し一人一人が発表する機会を設け、教具（ワークシート、付箋紙、ホワイトボード、ICT機器等）の工夫と活用を進めた。ここでは、生徒が自他の意見を交流する中で試行錯誤し、協働して課題を解決しながら自分の考えを深めることができたか検証する。

第8時では「仮名文字がなぜ使われるようになったのか」を話し合う対話的な学習を通して仮名文字の発展が平安時代の文化にどのような影響を及ぼしたのかを考え、まとめることをねらいとした。前時の授業において国風文化の特色について全般的に学習し、本時では発展課題として仮名文字を題材として取り上げた。

始めに「平仮名と片仮名の便利な点や良い点は何か」を個人で考え、付箋紙に記入した。生徒たちからは「画数が少ない」「分かりやすい」「外国言葉と日本語のちがいが分かる」「オノマトペとして使うから」等といった自分の経験に基づいた意見が出された。個人で考えた意見をグループで共有する場面においては比較・分類しやすいようにベン図の形をしたワークシート（図4）を用いた。次に「仮名文字がなぜ使われるようになったか」をグループで話し合った。半数のグループでは菅原道真の和歌（表5）を参考に意見交換していく中で、仮名文字自体が表音文字のため（特定の意味がない）歌の情景（イメージ）が伝わりやすいという意見がまとめられていた。また、他のグループからは「日本独自の文化がうまれたことにより、いままで使っていた漢字だけではなく、ひらがなやカタカナも使うようになった（日本が独立するために自分たちの文化を作っていくため）」という国際関係を視点においた意見がまとめられていた。グループの発表後に、国風文化が起こったから仮名文字が使われるようになったわけではなく、仮名文字の発展も含めて国風文化が栄えたことを全体で確認をした。唐が衰退していく状況において他国との関係をふまえて考えられた意見であった。

話し合いの場面においては机間指導を通して、グループの意見を認めながら疑問点を投げかけたり、生徒の発言をひろって他の生徒につなげたり、説明を付け加えさせたりして、意見をまとめることができるように支援した。ホワイトボードに意見をまとめていく過程で、図5のように内容に変化がみられたグループもあった。「漢字だけの文と仮名文字だけの文を比べて気づくことがある？」と教師が声を掛けると、「あっ、分かった様な気がする。でも説明が」と反応する生徒が現れ、その発言を契機に生徒たちが試行錯誤しながら意見を出し合い課題解決に向かっていく様子が伺えた。

図6は生徒Aによる授業のまとめの記述内容であるが、個人の考えを書く場面では意見をまとめることができず無記入だったが、グループでの話し合いを通して他者から意見を形成する手掛かりを得、記入することができた。また、終末の相互評価からは「〇〇さんのちゃんと詞の意味も理解して発表しているのが良かった」や「〇〇さんの意見で国風文化を自分たちで作ろうという所がよかった」という記述がみられ、生徒が他者の良いところをしっかりと評価し

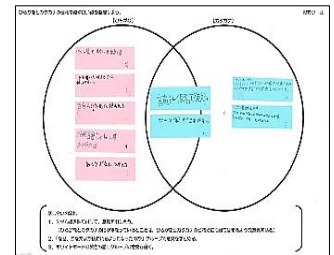


図4 グループのワークシート

表5 菅原道真の和歌

古知布加婆
こちふかば
爾於伊於古世用宇米乃波那
においおこせようめのはな
阿流自那斯斗帝
あるじなして
波流那和須禮蘇
はるなわすれそ

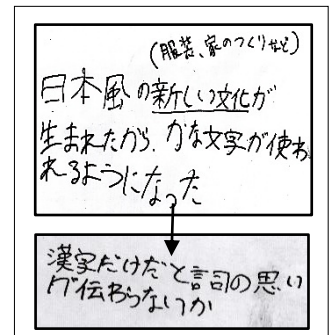


図5 話し合いにおける意見の変容

漢字だけの歌だと、漢字にはいろんな読み方があるから、漢字だけだと、何の話をしているか分からなくなるからかな文字ができた

図6 生徒Aの授業のまとめの内容

ていることが分かった。対話的な学習を通して生徒が他者と協力しながら課題解決に向かい、自他の考えを伝え合いながらグループの意見を集約し、そこから自分の意見を深めていくことができたと考える。

(3) アンケートの分析と考察

図7の「自分の意見を書いたり説明する時、分かりやすくまとめていますか」の質問結果からは、肯定的な回答をした生徒の割合が68%から89%へと上昇し生徒が自分なりに工夫して意見をまとめていることが分かった。これは、対話的な学習を取り入れることで自分の意見を他者に伝えるために工夫するようになったからだと考える。また、学級全体における発表の場面では、代表者が上手く説明できず困っている時に同じグループのメンバーが説明を付け加えたり、「代わりに発表していいですか」と手助けしたりすることがあり、自分達のグループで話し合ったことをきちんと伝えたいという気持ちが表れた場面であった。

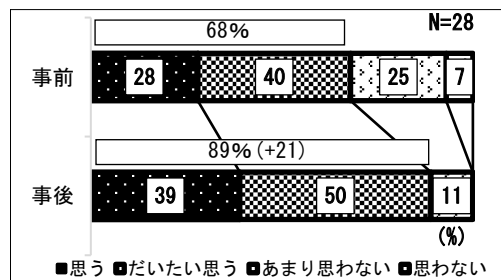


図7 自分の意見を書いたり説明する時
分かりやすくまとめていますか

次に「歴史を学ぶ理由は何だと思えますか」という質問を記述式で行った。表6で示すように前後において大きな差はみられないが、現在と関連付けた内容が最も多くなった。生徒からは「歴史はこれまでの政治の進み方などを学ぶ場所であり、これから自分はどうするべきかということを学べる良い機会」、「自分たちの暮らしにいたるまでにどのような努力や、出来事を学ぶためだと思います」等、今後の人生を歴史から学んだり、先人達の努力を尊重したりする等の意見が挙げられた。これらのことから、過去の出来事から学んだこと（知識の獲得）を自分の生活や現在の社会と結び付けて活用していこうという自覚が現れてきたことがわかる。歴史を学ぶ理由として全体の約半数が過去の出来事が現在や未来または自分とどのように関わっているのかということ意識していることから、授業において自分事として捉える学習課題を設定することは効果的だと考える。

表6 歴史を学ぶ理由についての生徒の意見の内訳

	現在と関連付けた内容	過去の出来事を学ぶ	未来志向の内容	自分と関連付けた内容	その他
事前	9名	15名	1名	2名	1名
事後	12名(+3)	10名(-5)	2名(+1)	1名(-1)	3名(+2)

以上の(1)～(3)より、自分事として捉える課題設定と対話的な学習の工夫を図ることで、歴史を自分や社会と関連付けて考え、他者との協働により課題を解決し、自分の考えを広げ深めることができたと言える。

IV 成果と課題

本研究では「思考力・判断力・表現力等を育成する社会科指導の試み」をテーマに、自分事として捉える課題設定の工夫と対話的な学習の工夫を通して検証を進めてきた。その中で、次のような成果と課題を得ることができた。

1 成果

- (1) 歴史的事象を社会や自分と関連付け、多様な見方・考え方を働かせながら、対話を通して自他の考えを発展させることができ、思考力・判断力・表現力等を育むことができた。
- (2) 話し合い活動を繰り返し行うことで自発的になり、生徒同士で意見の交流を活発に行うようになった。また、これらが意欲や協力等の学びに向かう姿勢へとつながった。

2 課題

- (1) 話し合いの視点を更に多面化させるための資料の準備と提示の工夫を行う。
- (2) ペアの活動で差がみられた。ペアを意図的に決めるかまたは自由に決めさせて、話し合いが進みやすくなるような工夫と、考えるヒントの提示等が必要だった。

〈参考文献〉

- 文部科学省 2017 『中学校学習指導要領解説総則編』
- 文部科学省 2017 『中学校学習指導要領解説社会編』
- 澤井陽介・加藤寿朗 2017 『見方・考え方〔社会科編〕「見方・考え方」を働かせる真の授業とは?』 東洋館出版社
- 澤井陽介 2017 『授業の見方「主体的・対話的で深い学び」の授業改善』 東洋館出版社
- 由井菌健 2017 『一人ひとりが考え、全員でつくる社会科授業』 東洋館出版社
- 澤井陽介 2015 『社会科の授業デザイン』 東洋館出版社
- 文部科学省国立教育政策研究所 2011 『評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校社会】』
- 小原友行 2009 『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン 中学校編』 明治図書
- 安野功 2007 『社会科授業が対話型になっていますか』 明治図書
- 篠原昭雄・唐澤勝敏 1994 『中学校社会科 歴史の学習課題づくり』 明治図書

〈参考URL〉

- 文部科学省 教育課程企画特別部会における論点整理について（報告） 2015 年 8 月
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/sonota/1361117.htm
- シンキングツール～考えることを教えたい～ 2012 年 4 月
http://ks-lab.net/haruo/thinking_tool/short.pdf